

第7回全国大会アブストラクト —研究発表1点 & ワークショップ—

【研究発表】

無化する空間としての外部性 ——『ノストローモ』における帰属不能の力学

高橋 諒（神奈川大学他 非常勤講師）

本発表は、*Nostromo*におけるoutwardという鍵語を、主人公がour manと呼ばれながらnothingへと変容させる力学として考察する。銀をめぐる物語は、物質的価値(銀)と概念的価値(国籍)の対立を浮き彫りにし、Nostromoをその狭間で外部化された存在へと追いやる。彼はやがて帰属の場を失い、帰還の可能性を閉ざされた存在となり、Nostromoという呼称は単なる所有であったと読解できる。こうした外部性は、ポーランド人亡命者として国民的アイデンティティを持ち得なかったConrad自身の生涯と共鳴し、外部へ出ることがアイデンティティの不安定化と直結する様相を描き出す。

【ワークショップ】

Joseph Conrad, *Chance* (1914) —Part I, Chapter 1を読む—

狙い

*Chance*という小説は、*Lord Jim*と‘Heart of Darkness’と共にマーロウ三部作の一つと謳われるものの、研究対象としては他の二作品に比べ重要度が低いように思われ、一部の批評家には通俗的すぎるなどと評され軽視されてきた。コンラッド没後100周年が経過した今、この小説の冒頭部第1部第1章に焦点を当てて精読することで、新たにコンラッド研究の厚みを増すことができるのではないか、というのが本ワークショップの狙いである。

— 高橋 諒

■司会 伊藤正範（関西学院大学 教授）

■パネリスト1 高橋 諒

タイトル: 暗さの二重性

アブストラクト: コンラッドが「商業的成功」を狙って書いた*Chance*の物語冒頭における「海と陸」、「明暗」の対比に着目する。パウエルは船乗りの職に就く前の若き日々の陸上生活を「カタコンベ」

や「地下牢」といった比喻を用いて回想し、そこに嫌悪感を見出す。他方、出港前の暗い港でフェーンデール号を見つける場面では、同じ暗さでありながら嫌悪を伴わず、むしろ海に対する高揚感をつのらせる。そして、こうした暗さの二重性を、経験者として冷静に語るマーロウの皮肉な介入が浮き彫りにする。このようにして冒頭部は、“chance”という語の多義性を孕みながら、コンラッド的な曖昧さを提示している。

■ パネリスト 2 奥田 洋子（跡見学園女子大学 名誉教授）

タイトル：『チャンス』第1部第1章：「行為」対「偶発的な出来事」

アブストラクト：『物語論辞典』によると、物語の「始め(beginning)」では、プロットあるいはアクションにおいて一連の変化の端緒となるできごとが起こるといふ。『チャンス』では、登場人物の一人 Powell が物語世界の内的語り手 Marlow に、自身が乗組員として採用された際の、あるできごとについて語る。ならば Powell が主人公かと思いきや、彼は物語前半では表舞台から姿を消し、後半活躍するものの、冒頭の人物と同一人物とはいえないところがある。では、物語の「始め」としてのこの章は、どのような役目を果たしているのだろうか。

■ パネリスト 3 山本 卓（金沢大学 教授）

タイトル：大衆向け海洋物語としての『チャンス』

アブストラクト：コンラッド作品の中で最大の商業的成功を収めた『チャンス』は、事実と想像との境界が曖昧で、かつ饒舌なマーロウの語り、時間軸を行き来する物語の構成がモダニズム的な試みとして評価される一方で、登場人物のメロドラマ的な行動や事件の凡庸さは非芸術的な大衆物語として批判されてきた。しかしながら、第1部1章の最後における、陸でくすぶるマーロウへの語り手の憐憫の眼差しに注目するとき、マーロウの語りも、そこで話題に上がる女性についての彼の思想も「過去を語る退役者の視点」を帯び、この物語の芸術性についての過度な期待を牽制する。それゆえ『チャンス』を、コンラッドの晩年の著作に顕著な「ノスタルジアのナラティブ」として位置づけ、「海と船」にまつわる19世紀イメージの喪失の物語として読解する方が適切であるように思われる。発表では『チャンス』を同時代の大衆小説と比較し、20世紀初頭の文学作品における「海と船」の役割を考察する。